

THE 有頂天ホテル

2005(平成17)年12月7日鑑賞(東宝試写室)

★★★★



監督・脚本＝三谷幸喜／出演＝役所広司／松たか子／佐藤浩市／香取慎吾／角野卓造／原田美枝子／篠原涼子／伊東四朗／戸田恵子／生瀬勝久／麻生久美子／YOU／オダギリジョー／唐沢寿明／津川雅彦／西田敏行（東宝配給／2005年日本映画／136分）

……個性豊かなホテル従業員、ワケありのお客様、そしてカウントダウン用の芸人たち計23名の登場人物が大晦日の夜、一流ホテルの中でくり広げるドタバタ劇……ではない、人情味タップリの感動劇！ コメディ風のスピーディーな、舞台を思わせる人間模様の展開は、三谷幸喜監督・脚本らしく、実に緻密で計算し尽くされたもの。役所広司をはじめとする芸達者な俳優たちも、三谷演出に乗せられたかのようにみんなイキイキと楽しげ。これぞエンタテインメント映画、そしてお正月映画の決定版！

こちらはいくつのストーリー……？

クリスマスイブ、東京、大停電をキーワードに、6組12人の男女が織りなすラブストーリーを描いた映画が源孝志監督の『大停電の夜に』。そこで三谷幸喜監督は、こちらにも負けじとばかり（？）、大晦日の夜、ホテルアバンティの中で、23名の登場人物が織りなす物語で対抗（？）したが、さてこちらのストーリーはいくつ……？

ホテル内で展開される人間模様は映画向きのテーマとして最適のものだが、この『THE 有頂天ホテル』は、まさにそのエッセンスをまとめ、凝縮したもの。多くの登場人物が持つそれぞれのエピソードは、本来それ自体が深刻なもの。そしてそれらがホテルという1つの舞台の中で偶然に絡み合ってくれば、話はややこしくなり收拾がつかなくなるのが当然。

しかしそれをまとめるのが、三谷幸喜監督の脚本づくりの冴え。ヘタをすれば

ドタバタ喜劇にもなりかねないこれらの人間模様を、ユーモアと笑いを巧みに織り込みながら、まるで舞台上のようにスクリーン上でスピーディーに展開させていく手法は、さすが。

「2人芝居」の面白さを凝縮した『笑の大学』（04年）と対照的な「大人数芝居」を、よくここまでまとめたものと感心。「これぞ、三谷演出、三谷脚本！」と言うべき、一流のエンタテインメント映画が、お正月映画として登場だ！

登場人物の3分類

この映画の登場人物は、3分類することができる。まずは第1に、役所広司扮するホテルアバンティの宿泊担当の副支配人、新堂平吉を中心とするホテルの従業員たち。ホテルの幹部は、総支配人（伊東四朗）と料飲担当の副支配人、瀬尾高志（生瀬勝久）の2人。しかし、総支配人はノー天気でカウントダウンパーティーの秒読みをすることしか興味がないバカ上司だし、瀬尾は典型的なゴマスリ人間。したがって、いつも新堂の指示を仰ぎテキパキと働いているアシスタントマネージャーの矢部登紀子（戸田恵子）をはじめ、ベルボーイの只野憲二（香取慎吾）、客室係の竹本ハナ（松たか子）や野間睦子（堀内敬子）、そしてウェーターの丹下（川平慈英）らは、みんなが新堂ファン。そしてその1人1人の個性はビックリするほど面白い……。

第2は、汚職国会議員、武藤田勝利（佐藤浩市）やホテルの部屋に泊めている若い愛人に家族の反対をおして会いに来る会社社長の板東健治（津川雅彦）、そして大物演歌歌手の徳川膳武（西田敏行）など。それぞれ大いなる「訳あり」の、アバンティのお客様たちだ。

さらに大晦日の今日、マン・オブ・ザ・イヤー賞を受賞したため、そのパーティーの主演として、妻の堀田由美（原田美枝子）とともにホテルにやってきた堀田衛（角野卓造）もその1人。

そして第3は、大晦日のカウントダウンパーティーに花を添えるショーに出演するため待機している芸能プロダクション社長赤丸寿一（唐沢寿明）率いるケッタイな芸人たち。マジシャンのホセ河内（寺島進）や腹話術師の坂田万之丞（榎木兵衛）が織りなすストーリーも面白いが、何とも興味あるキャラは、私の大好

きな YOU 扮するシンガーの桜チェリー。ホテルアバンティの次期総支配人は新堂だと目をつけた赤丸は、安定した仕事にありつくべく、新堂に対してこのチェリーを色仕掛けの「くノー」として(?)活用しようとしたが……?

これらの多くの登場人物が入り乱れる人間模様は一見ドタバタ劇風だが、なぜかカウントダウンを大合唱する時には、それらの心が1本に……。

こんなコールガールなら……?

前述の3分類の中に入らない登場人物も約1名……。それは一流ホテルの嫌われ者であるホテル客目当てのコールガール。そんなイヤなコールガールのヨーコを明るく天真爛漫に演じているのが、かつて『恋しさとせつなさと心強さと』を大ヒットさせた私の大好きな元歌手の篠原涼子。フカフカのいかにも高級そうな毛皮を着ているが、その毛皮の下の衣装は……?

ホテルの中に立っていると、客引きのためと誤解され、瀬尾副支配人からも新堂副支配人からも丁重に「お引取りを」と要求されるが、実は今日は人探しというれっきとした目的が……? そのお目当ては、本日のマン・オブ・ザ・イヤー賞の受賞パーティーの主演である堀田衛。実はこの2人の仲は……?

ホテル従業員のみんなから嫌われるヨーコだが、そんなヨーコとひよんなきっかけで顔を合わせた、ホテル内での逃亡生活にあきあきしている国会議員の武藤田勝利は、ヨーコとたちまち意気投合! さてこの2人の成り行きは……? こんな美人で気立てのいい(?)コールガールなら、俺だって……?

意外な役柄もキッチリと……

役所広司をはじめとじてほとんどの俳優は本来の持ち味を持ち味どおりに出しているが、意外な役柄をキッチリとまとめているのが唐沢寿明とオダギリジョーそして YOU の3人。ケツタイな芸能プロダクション社長を演ずる唐沢寿明は、まだ誰か見分けることが可能だが、ホテルの筆耕係、右近を演ずるオダギリジョーは配役表を見るまでは誰だかわからなかったほどヘンな奴……? また、『誰も知らない(Nobody knows)』(04年)で見事な演技を見せた YOU は、歌手志望ながらそれが叶わず、赤丸から色仕掛けの「くノー」の役割を与えられ、仕方な

くそれをオーケーするという惨めな役柄を一貫しておどおどと演じていたが、カウントダウンパーティーの舞台上に歌手として登場するやその表情は一変し、観客からヤンヤンヤの喝采を……。

こんな3人の姿を見ていると、やっぱり役者ってエライものだとあらためて感心。

近藤勇よりもやっぱりこっちの方が……？

メジャーの歌手を夢見て、ストリートミュージシャンを続けながらベルボーイとして働いているのが只野。しかしその生活が8年にも及ぶ中、大晦日の今日、ついに彼は歌手への道を断念し、田舎に戻って家業の果物屋を継ぐことを決意した。したがって今日は、華やかなカウントダウンパーティーとは別に、ささやかな彼の送別会も……。

ところが、そんな只野に「夢をあきらめるな！」と激励したのが、普段他人のプライバシーに介入しない新堂。さて、それはなぜなのか……？

さらに、やっとホテルの制服を脱ぎ、はじめてホテルの客としてパラーの席に座った只野の目の前に現れたのが、今はスチュワーデスになりたいという夢を実現した幼なじみの小原なおみ（麻生久美子）。なおみはその日ずっと只野に付き添うことになったが、さてその結末は……？

2004年のNHK大河ドラマ『新選組！』で主役の近藤勇を演じた香取慎吾君だが、やっぱり等身大のこちらの役の方がピッタリ……？

相変わらず安定した演技の津川雅彦と西田敏行……

愛人に対して（？）、息子の直正（近藤芳正）が別れてくれと必死に頼み込まなければならないほど、おさかん（？）なのが津川雅彦演ずる板東健治だが、その後ろ姿だけで、声を聞けば津川雅彦だとわかるその堂々たる演技はさすが。

また、あの名作（？）『ゲロッパ！』（03年）を彷彿させるのが、大物演歌歌手の徳川膳武を演ずる西田敏行。リハーサルで歌詞を忘れた自分に絶望し、明日の本番には絶対出ないとダダをこねる姿は痛々しい限り。

しかし、新堂の頼みによって今晚だけ臨時のベルボーイに戻った只野憲二や小

原なおみの応援によって一転して元気になった徳川は、まるで別人。そんな徳川から「歌うのは趣味が1番。プロ歌手なんかになるもんじゃないぞ」と言われた只野は大ショックだが……。

社内恋愛の行方は……？

もう1つ面白いのが、ウェ이터の丹下と客室係の睦子という若者同士の恋愛劇。もともとこの2人は結婚を前提につき合っていた雰囲気。だって2人の会話を聞いていると、睦子の部屋に丹下は自由に出入りし、泊まったりもしていたようだから。そんな2人の痴話喧嘩の発端は、パンツ騒動……？ そのいきさつは映画を観てのお楽しみだが、この丹下君は今ドキの若者に似合わず、一途で押しが強いタイプ。そして、やっぱり女はそれに弱いもの。カウントダウンパーティー直前に一大決心をして、筆耕係の右近に書かせた結婚申込書(?)に対する睦子の返事は……？

離婚経験者や元愛人のオンパレード……

「多人数芝居」のこの映画で三谷脚本が冴えたのは、離婚経験者や元愛人を多数登場させたこと。なぜなら、離婚を経験した夫婦や長年続いた愛人関係を解消した男と女の間には、それなりの涙ぐましい物語があるうえ、離婚や縁切り後は、またそれぞれ別々の物語があるのが当然だから。しかして大晦日の夜、そんな男女が偶然再会し、そこにさまざまなハプニングが重なれば、面白い人間模様が浮かび上がるのは当然！

それらの面白いストーリー展開は映画を観てのお楽しみだが、ここでは①今は堀田衛の妻となっている堀田由美が新堂平吉の元妻であること、そして②会社社長板東健治の愛人とまちがえられ、息子からヘンな手切れ話を持ち込まれる接客係の竹本ハナが、国会議員武藤田勝利の元愛人であったということだけ紹介しておこう。そして面白いのは役所広司演ずる新堂平吉にしても、佐藤浩市演ずる武藤田勝利にしても、やっぱり元妻や元愛人の女の方がしっかりしていることはたしかだということ……？

これら離婚経験者や別れ話の経験者たちが織りなすハプニング連続の物語は、

新堂平吉と同じく離婚経験者の私が観れば、面白くも悲しくそしてドラマティックなもの……？

思わず思い出した『ショムニ』……

新堂の元妻の堀田由美から「しっかりしているようだけど、意外に頼りないところもあるからね」と言われるアシスタントマネージャーの矢部登紀子を演ずる戸田恵子は、私にとっては何といても人気テレビドラマ『ショムニ』でのイメージが強い女優。そして『ショムニ』と言えば、11月23日、私が呉の「大和ミュージアム」と尾道の戦艦大和のロケセットの見学に行った時、スポーツ新聞の1面見出しに踊っていたのが「松井秀喜、戸田菜穂と婚約」という記事。そう、この戸田菜穂も『ショムニ』に登場し、江角マキコ率いる庶務二課軍団に対抗する花の秘書課軍団のまとめ役だった女優なのだ。映画を観ながらこんなことを次々と思い浮かべていく俺って、かなり芸能通……？

さらに追加していえば、ヨーコ役の篠原涼子がミュージカル俳優の市村正親と結婚したことが12月8日の新聞各紙で報じられたが、24歳も年上のオッサンとさてうまくいくのだろうか……？

お正月映画に最適！

この映画は、12月31日に観れば最も盛り上がるはずだが、残念ながら正月明けの1月14日の公開。したがって、「お正月映画」というのは少し気が引けるが、そのすばらしいエンタテインメント性を考えれば、「お正月映画に最適！」と評価できるもの。「いつまで正月ボケしているんだ！」と怒られることを覚悟で、是非多くの人たちに楽しんでもらいたいものだ。

2005(平成17)年12月8日

SHOW - HEY にとっての昭和とは？

— 植木等映画と『昭和枯れすすき』にみる昭和の二面性 —

◇明治・大正と比べ、昭和の時代は63年+7日間も続いただけに、その時代を生きた人間の思いは人それぞれ……。日本アカデミー賞で12部門を獲得した『ALWAYS 三丁目の夕日』が描いた昭和33年の東京タワー建設の時代は、まさに日本が高度経済成長に足を踏み入れた時代。しかし、小学校低学年の私に、まだそんな実感がなかったのは当然。

他方、『いつでも夢を』の歌をベースに『カーテンコール』が描いた昭和38年は、中学生になったばかりの私にはキラキラと輝く昭和の時代だった。そのため私は勉強そっちのりで、映画館通いの日々を……。

◇高度経済成長の中、家庭にはテレビが入り込み、娯楽の主役が次第に映画からテレビに移ったのは当然。その結果始まったのが、映画の斜陽化と今ほどひどくはないものの映画とテレビのバラエティー化。その代表が昭和37年の『日本無責任時代』に始まった植木等とクレージーキャッツによる10本以上製作された「植木等映画」。「昭和元禄」という表現がピッタリの、こんないい時代が継続すればよかったのだが……？ 今から考えれば、昭和元禄の

ピークは昭和45年の大阪万博。三波春夫が歌った、ノー天気で楽しさいっぱいの『世界の国からこんにちは』はまさに絶品……？

◇しかし太平の世は長続きせず、斜陽化を続ける映画界は、日活ロマンポルノ路線への転換や独立プロ系作品への傾倒など「苦悩の道」が始まった。そんな昭和の敗北感と切なさを歌謡曲の世界で代表するのは、昭和49年「さくらと一郎」が「貧しさに負けた、いい世間に負けた」と高らかに歌いあげて大ヒットした名曲『昭和枯れすすき』。この歌は、翌昭和50年に秋吉久美子と高橋英樹主演で映画化され、新宿歌舞伎町を一躍有名にしたものだ。

◇他方、奇しくも私が弁護士登録したのが昭和49年4月。したがって、私がやった大阪国際空港公害訴訟や西淀川公害訴訟、そしてその後の都市問題を中心とした弁護士活動はすべて、昭和30年代の高度経済成長政策による負の遺産のゆがみを是正するための闘いとなった。そしてついに土地バブルの絶頂期である昭和64年1月7日に昭和の時代が終わったが……？

2006（平成18）年4月19日記